会長就任にあたって

岸　輝雄　東京大学先端科学技術研究センター教授
工業技術院産業技術融合領域研究所所長

この度第83回通常総会の場において本会会長に選任されました。数多くの諸先輩会長と比較し、経験の乏しさゆえに身の引き締まる思いです。日本の鉄鋼業を支えてきたこの伝統ある鉄鋼協会のより一層の発展のために浅学非才ではありますが努力したいものと念願している次第です。

本協会は戦後の鉄鋼業の著しい発展と共に、着実にその内容を充実してまいりました。しかし、産業構造の変革期を迎え、鉄鋼業もその例外ではなく、大きなリストラに直面し、それに対応して本協会自身もリストラ80としてその組織および運営の仕方を大きく変更しました。最も大きな部分は学会部門、生産技術部門に分ける運営を開始したことです。産と学が連携するための場でありながら、あえて2つに分けて個々の発展を促しつつ、その連携を探る方向を模索したわけです。

学会部門に関しては機関誌の論文数はもとより、内容も順調に向上し、かなりの評価を得るに至っております。今後は、英文論文集は世界に冠たるインパクトファクターを有する学会誌への発展が望まれると言えます。一方、学会部門の両輪と言える講演大会については、その論文発表数が減少していることは大きな課題です。もちろん、発表の内容が高いという言い方で済ましてしまえれば問題はありませんが、質と量が比例することもよく指摘され、それなりの対応が必要です。リストラにより企業の研究者の数が減り、それでいて大学関係の鉄鋼研究者の人口が増える状況にはありません。また、材料研究のあり方の変化が生じています。研究領域が細分化され、高度な研究が要求される昨今では、何か一つ卓越した研究手法(実験、理論、計算、どんな方法でも)を持つことが不可欠になってきました。優れた研究手法を持つ研究者がその手法を活用する場合、金属、非金属を問わず、その応用を進めていく方向を模索します。大学における冶金学科が材料学科に変遷したのは、色々な材料の研究が必要であると同時に、高度な研究手法があらゆる材料に共通的に使えるという状況にも依存しています。

それゆえ、鉄のみを研究の対象とし、その問題点を解決するために多種多様な手法を用いる研究者群と、素晴らしい手法を扱う材料研究の一部に鉄鋼が含まれる研究者群が存在することを認識すべきです。重要なことは、後者の研究者群を鉄鋼協会の中に引入れ、活躍していただく場を作りうるかどうかにかかっていると言えます。また、鉄鋼の各生産プロセスに関係する要素技術に加えて、今後は環境・エネルギーおよびリサイクル等の取扱いが大きな課題になります。この場合には、細分化された現状の研究手法から総合的に、かつ統合化した研究体制をとることが必要になります。

生産技術部門は、これまで共同研究部会として鉄鋼業の発展に大きな寄与をしたことは疑いもありません。今後ともに技術者の交流の場としてこの日本流の特徴を活かすとともに新しい技術の芽を育て、そして学会部門へ提供できるニーズを明確にしていくことが期待されます。

昨今、産業界のみでは基礎的な研究を推進しきれないということも含めて科学技術基本計画が制定され、国が基礎研究に積極的な支援を決めております。鉄鋼の分野においても、金属材料技術研究所がSTX21プロジェクトとして2倍の強度、2倍の寿命を目標に鉄鋼材料の開発に乗り出したことは誠に時期を得た英断であり、かつ基礎研究の意味からも心強い限りです。大学においても、産学共同のあり方の一つとして各分野別に拠点となるべき大学を明確にし、鉄鋼協会が中心になり、その支援体制を産学で進めてくことが望まれます。鉄鋼の科学技術の戦略マップを作成し、協会内の資金配分はもとより、外部資金の導入にも努めたいと計画しております。そのために鉄鋼科学技術戦略委員会を設け、わかりやすい鉄鋼技術の将来を見通す計画です。この時留意したい点は、国際協調と生産技術と学会部門のブリッジングにあり、総合企画に期待する所は大きいと言えます。

いずれにせよ、これからの2年間は野田前会長のもとに作成された新中期計画「鉄のプレゼンスの向上」「国際化」「運営の自立化」という三つの課題をこなすことにあります。充分に検討された上記課題を実行することを今期の目標とさせていただきたく皆様のご協力をお願いする次第です。よろしくお願い申し上げます。